

人と人
つながりの物語

illustration: Maiko Dake

コープデリグループの組合員数は約550万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。

長野県に住む陽愛さんは中学2年生。「自分の国で起きたことはちゃんと知りたい。一度は被爆地・広島に行きたい」と、昨年「ピースアクションinヒロシマ・子ども平和会議」に応募。毎年8月に全国の生協の組合員やその家族が平和の尊さを学ぶもので、コープながのの代表として母と一緒に参加した。

8月には広島で、現地ガイドとともに今も残る戦跡や慰霊碑を訪ね歩いた。名前が分かる約800人を含む、およそ7万人分の引き取り手のない遺骨を安置する「原爆供養塔」に手を合わせた陽愛さんは、「戦後80年たっても家族の元に帰れないなんて、どんなにつらいだろう」と胸が痛んだ。一方で、復興のために国内外から多くの支援があったこと、毎年世界中から手紙や千羽鶴が届くことを聞き、希望も感じた。「みんなに助けられて今の広島、日本があつて、被爆の歴史を知る人がたくさんいる。心強く思いました」

全国の小中高生が集まった「子ども平和会議」では、それぞれが事前学習で学んだことを発表し、平和について話し合った。「改めて『平和とは?』って考えると難しかったけれど、毎日ご飯が食べられて、安心して眠れて、自由に遊べて学校にも行ける。そういうくらしが平和だと私たちは考えました。大事なのは、私たち世代が戦争を知ること。戦争の話は怖いけれど、恐ろしさを分かっているのと同じことを繰り返すと思います」

さんは家族からも学んだ。陽愛さんが生まれる前に亡くなった曾祖父は、生前つらい記憶を話していた。それを母が文字や音声で残してくれたおかげで、満州での生活や生々しいシベリア抑留の体験を実感することができたのだ。

「全世界の人が、物事を争いで解決しようとせず、話し合い、分かり合えたら」と願う陽愛さん。将来の夢は、途上国で子どもたちを支援すること。小学生のときに、アフガニスタンなどで病や貧困に苦しむ人々に寄り添い、用水路を建設した医師・中村哲さんの伝記を読み、自ら紛争地に赴いて人々を救う姿に感銘を受けたという。「実現するには語学の勉強を頑張らない」と話す笑顔は、平和な未来への道を指し示している。

過去の物語も
こちらから読めます



あなたのエピソードを
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。